「負けてたまるか」は、母の口癖（くちぐせ）　　森町遺族会　太田和子

父は、昭和 18 年 10 月、中国広東省で戦死した。多くの戦死者がそうであった様に、英霊といわれた白木の箱には遺骨は無く、軍隊手帳だけが入っていた。私 4 歳、妹 2 歳、片麻痺の祖父、リウマチを患い足の不自由な母が残された。

「骨が無いのだから、中国のどこかにきっと生きている、探しに行きたい」「私が大きくなったら、きっと探してくるから」が母娘の会話であった。

戦争がどんなものかも知らず、ましてや戦地の凄惨な映像など目にすることも無かった時代であった。

母はある時、妹を背負い、私の手を引いて、大雨後の濁流の太田川の淵に立った事があった。「死ねば父さんのところに行ける」とよくつぶやいていた。突然、妹が大泣きをした。母が私の手を強く握りしめた。私は母の手を、力いっぱい、後に引いた。「いやだ、いやだ、だめ、だめ」と、桜の木の下で暗くなるまで、3 人で大泣きして家に戻った。

母はその後、「負けてたまるか」が、口癖になった。半身麻痺の祖父と幼い妹は私が世話をした。母は雇ってくれる仕事があれば何でもやった。母の寝姿を見たことがない、優しいけれど厳しい母であった。「負けてたまるか」は、私の体にしみついている。

過酷な時代を生きた母は、59 歳で脳出血で急逝し、父のもとに旅立った。

私は、平成 10 年の夏、日本遺族会の「中国慰霊友好親善訪問団」の一員として、中国を訪問する機会を得た。母が亡くなった年と同じ 59 歳の時であった。その時の団長が現在の日本遺族会会長の水落敏栄氏であった。

北京、長沙、南昌と、中国各地を慰霊巡拝し、長江の辺りで小石を三つ拾った。一つは母の眠る墓地に、一つは仏壇に、一つはお守りとして、　帰路、北京の雑踏の中でふと視線を感じた。長身の父がそこに立っているような気がした。父はこの中国に居る、父の魂は確実に中国に居る、と思った。「必ず、また来るからね」と、心の中でつぶやいた。

私は今、82 歳。家族に恵まれ、幸せに暮らしている。戦争を知らない若者達が、未来永劫幸せに暮らしていけるよう、戦争のない、戦争をしない、平和な国であることを祈るばかりである。

私の比島慰霊巡拝について　　森町遺族会　松尾　要

私の兄は、昭和 19 年 1 月 10 日に出征し、昭和 20 年 5 月 30 日フィリピン・ルソン島で戦死したとの公報が父の下に届けられた。出征した兄からの連絡は、

広島で部隊が編成され、フィリピン・ミンダナオ島に渡り初年兵教育を終えた後、幹部候補試験に合格し、マニラ近くのトンコマンガという場所で幹部教育を受けているとの手紙が最後だった。兄の戦死から 3 か月後に終戦となり、多くの兵士が復員となる中で、私達家族は兄の戦死が信じられなく「もしや兄も生きて帰ってくるのではないか…。」と帰郷を祈る日々であった。

長男の戦死で二男の私が家業を継ぐことになり、この 90 歳まで農業一筋に生きてきた。22 歳で戦死した兄の終焉の地を一度訪ねてみたい気持ちで、平成 3 年の厚生労働省の遺骨収集に参加された森町の知人に、兄の終焉地を説明して情報の収集をお願いした。後日、知人から「偶然兄の戦友の古川さんに会うことができた」との連絡を受けて、早速広島県に在住の古川義信さんと連絡を取り、翌年から連続して 4 年間、古川さんと一緒に兄の終焉地のヤンビランとボネに慰霊巡拝を行った。

古川さんの話によると、兄たちは昭和 19 年暮れにルソン島北部のサリナスに集結し、「戦車撃滅隊」として敵戦車を撃破する訓練を夜間ジャングルの中で行っていた。昭和 20 年 5 月 28 日に米軍が北上して来るとの情報を得て、ヤンビランとボネに布陣して敵の北上を待っていたところ、5 月 30 日敵戦車を発見し、戦車撃滅隊の二人が敵戦車に突入し爆破したことから、米軍は一旦退却したが直ちに飛行部隊をもって反撃し、石油缶や焼夷弾を投下し、日本軍のいた山全体を焼燬（しょうき）し日本兵を殺害。兄はこの地で戦死した。地元の比島人の話では死体を山沿いの川に投げ捨てたとのことだった。

2 回目の慰霊巡拝の時だった。ボネに着くと現地住民十数人が集まって何か騒がしくしていた。話を聞くと「1 週間前から毎夜 8 時頃この前の道路を軍服姿の日本兵が行き来して気持ちが悪いので何とかしてほしい」とのことだった。私はとっさに兄たちの霊ではないかと思い、一緒に巡拝していた僧侶にお願いして慰霊碑の前で「霊よ、鎮まれ…」という経を唱えてもらった。その後もボネに 2 度巡拝したが霊の話は出なかった。「霊魂不滅」ということが良く分かった。

なお、古川義信さんは、米軍の攻撃の時マラリア病を発症し、ジャングルに残留していたため戦死を免れ、橋の下に隠れていたところを現地人に助けられ終戦で復員したとのことであった。そして戦後、日本兵終焉の地に自費で戦車撃滅隊英霊追悼碑と慰霊巡拝者が宿泊できる施設（チルドレンズ・パーク）を建て、英霊の追悼と慰霊巡拝者の現地奉仕に尽力した方だった。